

ファットマンに真珠

山内 正幸

長崎原爆資料館で長崎市に投下された原子爆弾の実物大模型を初めて見たとき、「ずいぶんでないなあ」というのが率直な第一印象だった。長さ三・二五メートル、直径一・五二メートル、重さは四・五トンあったという。

無機質な、とび色の巨大な物体の前に立ち、次に浮かんできたのは「よく平気で、こんなものを人の頭の上に落とすことができたものだ」という思いだった。

真つ当な人間ならアパート三階のベランダから過って鉢植えを落とすだけでも、ひやりと肝を冷やすだろう。だれかにケガをさせなかったか、とあわてて下をのぞき込む。それが普通の市民の感覚というものだ。

日常の市民感覚で、戦時下の原爆投下をどうのこうのと非難しても所詮は空しいだけかもしれない。戦争当事者にとっては「それが戦争だ」という一言かもしれない。

ただ、この爆弾は大きいというだけではなく残虐な大量殺戮兵器だった。約七万四千人の死者、ほぼ同じ数の負傷者、そして多くの人々が今なお続く様々な原爆症に苦しめられている。

そんな爆弾を米軍は市街地に投下したのだ。

米軍は長崎に投下した爆弾を「ファットマン」と呼んでいたという。「太っちょ」という意味らしい。まさにその名の通りの

模型を目の前に、いささか腹立たしくなった。

「太っちょ」か。子どものけんかで相手をからかう言葉ならまだわかるが、これは原爆だ。そもそも、こんな爆弾に愛称をつける感覚からして理解できないが、それにしても、爆弾を炸裂させたその先に広がる地獄さながらの惨状、罪深さに対する心の痛みを、みじんも感じさせない。「名付け親」はだれだ……。

原爆に米国は鈍感、そう思わざるを得なかった。

同じ思いを、林京子のエッセーを読んだときにも感じた。

芥川賞を受賞した一九七五年の『祭りの場』以来ずっと原爆を問い続けている作家で、長崎の被爆者である。エッセーは「トリニティの大地」と題がつけられていた。トリニティは米国が広島と長崎に原子爆弾を投下する前、世界で最初に爆発実験をしたところで、年に二回、爆心地が公開されている。

林京子は一九九九年、この地を訪れた。五十四年前、爆発の瞬間、土や砂は閃光と熱風に吹き上げられ空中で溶けて寄り合い丸い石に姿を変えた。「白人女性の係官は、直径一センチほどの灰色の珠を掌にのせて、ワタシタチハコレヲ真珠トヨンデイル、と説明した」と彼女は見学当時のことを記している。

このことは翌年に発表された作品『トリニティからトリニティへ』でも書かれていることは後で知ったが、原爆が一瞬のうちに造り出す不気味な塊を、海中の貝が長い年月かけて生み出す真珠と同一視する。この感覚には、どうしても違和感が残る。

真珠が私の誕生石であることを、さて置いてみる。

ファットマンや真珠が米国の共通感覚なら、やはり怖い。